

ケーション論的側面にある。このコミュニケーション論的側面である、匿名性によるロールプレイやカウンセリング機能、性的アイデンティティの確立といった機能は、援助交際というコミュニケーションに顕著に見られるものである。本稿の事例においては、援助交際が単なる「お金」と「性」の交換ではないということを呈示できたと思われる。

現代日本社会において「援助交際」という社会問題が登場してきた背景には、経済の低成長率に見られるように、これからも大きく変わることのない、人々が日々のルーティンをこなしていくという閉塞した社会状況が関係していると思われる。「退屈な日常生活」を送っている主婦やOLが「出会い」や「トキメキ」や「変化」を求めて援助交際を始めるように、個人にとって性に関することがらこうした退屈な日常や平凡な自己から離脱する契機を形成しているのである。

最後に調査方法論に言及することをもって結びにかえたい。都市的な環境と文化を共有し、複雑な社会関係の中で幾つもの顔をもつ人々への調査には独特の方法論が必要である。調査対象を都市的な社会現象とその当事者に特定し、当事者にとって実存に関わるような調査を、ここでは従来の、文化人類学的・民俗学的なフィールドワークと差異づけるために、社会学的フィールドワークと呼びたい。

当事者の内面に踏み込み、当事者にとって実存に関わるような調査は、これまでのフィールドワークとは違って、調査者自身を観察者の位置にとどめることはない。またその調査自体によって調査者自身が問われることになる。問われているのは自らの立場や考えである。筆者自身が被調査者によって、逆に聞き取りされるという事例を、反省的な意味合いをこめて紹介したい。

<データ12> ( ): 筆者補足

筆者：あと、なんか聞きたいことある？

ユキ：あなた自身は援助交際についてどういう風な考えを持っているんですか？

筆者：僕？別に援助交際は悪いとは思ってないよ。

ユキ：やろうと思えばやろうと…

筆者：えっ？何が？

ユキ：援助交際をやってみたいと思う？

筆者：えっ、僕が。(援助交際) お金払ってまでするもんじゃないと思っているから。そんなんしないと思う。したこともない。

ユキ：「やって」て、言われたことないですか？

筆者：えっ、何を？

ユキ：「援助交際して欲しい」って言われたことないですか？

筆者：逆援助とか？どういうこと？

ユキ：女の子の方から、「援助交際して欲しいけど」って、「お金が欲しいんやけど」って言われたことないですか？

筆者：そういうのはテレクラで取材してたらしょっちゅうやけど、伝言でもいるけど断っているよ。断っているというか、相手にしてないけど…

(1998.2.19 収録)

私自身は「聞く一話す」という関係が逆転したことに対して違和感を感じ、とぼけたり聞き返したりして抵抗しているのがよく分かる。当事者にとって実存に関わるような調査は、調査者自身が観察者の位置にとどまったり、また「調査者-被調査者」の関係に固執し無関連を装うのならば、当事者はこちらが本当に聞きたいことを話してはくれない。社会学的フィールドワークの成功基準は、調査者にとっては相手の警戒心を解いて明らかにしたい事象について抵抗なく話をしてもらえるか、被調査者にとっては調査に応じたことに納得できるか、話してよかったという満足が判定の基準となる。

最後に社会学的フィールドワークが当事者の実存に関係するがゆえに、必然的にもってしまうカウンセリング的機能の事例を紹介して本稿の終わりとしたい。

<データ13> ( ): 筆者補足

筆者：なんでこういう(援助交際の)調査っていうか、インタビューに応じてくれたん？

アキ：う〜ん、おもしろそうやから。うん、私自身、社会学とか、まあ勉強してたのもあ